黒岩涙香譯述『人の運』

―原典の発見および原典との相違について―

河村民部

序

本論は二つのことを目的とした研究論文である。ひとつは、これまで長い間原典が発見されずに、誤った推測がなされてきた黒岩涙香の翻訳小説『人の運』の原典を発見したことの報告であり、もう一つは、原典と訳本を対比して、涙香が如何に原典を、本人の言によると、「譯述」したか、あるいは涙香の「譯述」という場合の実態である、「翻案」したかを論じるために、最初に原典の梗概を詳しく述べ、それとの対比で訳本の原典との相違を明らかにし、訳本の意義を改めて評価することである。

これまでにこの翻訳小説はElizabeth Braddonという19世紀イギリス小説家の*Lady Audley's Secret*あるいは*Hostages to Fortune*の翻訳ではないかと推論されてきたが[(1)]、近年推理小説家の小森健太郎氏が、*Lady Audley's Secret*ではないということだけは、明らかにした[(2)]。では誰のどの小説を原典として、その翻訳をしたのかということは、いまだに解明されてはいない。それをここで明らかにする。

原典はElizabeth Braddon, *A Strange World*（Bernard Tauchnitz, Leipzig, 1875ないしはLondon: John Maxwell and Co., 1875、first edition）であるが、涙香が翻訳に用いたのは、翻訳出版の明治27年に近い年月の版、例え

ば、本論の写真に挙げたような、Simpkin &Co., Limited, 1892のような廉価版で、書店や貸本屋のみならず、当時流行を見た鉄道売店でも買える版（いわゆる、鉄道文庫）ではないかと思われる。原典は19世紀イギリス小説に倣って、もとは三巻本であり、現在では大英図書館およびイリノイ大学図書館には初版があり、イリノイ大学図書館はウェッブ公開もしているし、またデジタル・オン・ディマンドで注文購買もできる。1892年出版の廉価版では章が通しの一巻本になっている。

訳述『人の運』は最初『萬朝報』（明27.3.21 ～ 10.24）に掲載されたが、単行本としては、初篇と後篇の二冊に分けられ、初篇は50回の253頁、後篇はそれに続く通し番号の108回の539頁から成る和綴じ本で、愛花仙史（本名三木貞一）の前書き「題人之運」を付して、扶桑堂から出版社された。愛花仙史は『朝野新聞』、『東京公論』を経て涙香の主催する『萬朝報』に入社した明治・大正の新聞記者であり、漢文小説『新橋八景佳話』、『南総美談復仇実記』、『情天比翼縁』などの作者である[(3)]。初篇は明治27年11月発行、後篇は明治28年1月発行である。以下本論でテクストとして使用したのは、筆者所蔵のElizabeth Braddon, *A Strange World*（Simpkin &Co., Limited, 1892）と天理図書館所蔵貴重本の涙香小史譯述『人の運』（扶桑堂、明27 ～ 28）である。

原典の*A Strange World*の著者エリザベス・ブラッドンは、ヴィクトリア朝中期に、*Lady Audley's Secret*（1861）という煽情小説（Sensation Novel）でデビューし、八十五編の小説を世に送り、明治初期の日本の翻訳界を席巻したイギリス小説の大立者で、ニューゲイト・ノヴェル（Newgate Novel）の創始者と目されたEdward Bulwer-Lytton（1803-73）を師匠に持ち、妻子ある男性との関係でも一世を風靡したフェミニズムの先端を行く女流作家である。彼女はディケンズのような“great novelist”ではないにしても、“great storyteller”と呼ぶに相応しい小説家としての優れた資質を持っていることは、上に挙げたような彼女の小説を一読すると、よくわかる。

また黒岩涙香といえば、我が国探偵小説の元祖としていまだに高い評価

を得ている明治期の大文豪であり、異色の日刊紙『萬朝報』を明治25年に創刊した新聞人として名を馳せた人物であることは、広く世に知られている。涙香の作家あるいは実業家としての詳しい伝記的事実については、伊藤秀雄『黒岩涙香――探偵小説の元祖』[(4)]や高橋康雄『萬朝報――黒岩涙香と明治のメディア人たち』[(5)]などに詳しいので、それを参照されたい。ここでは涙香が如何に原典の小説を、翻訳あるいは翻案あるいは創作し直しているかを明らかにするのが肝心である。

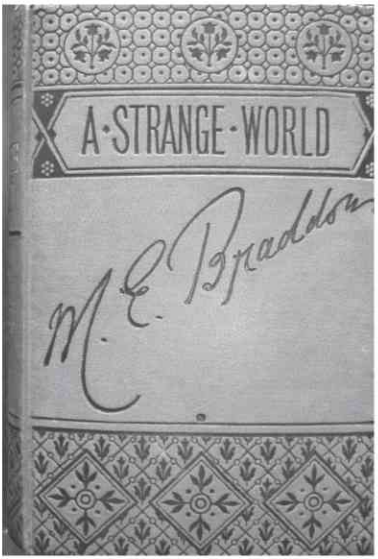
前置きはこれくらいにして、さっそくその肝心の本論に入りたい。

本論

Ⅰ. *A Strange World*（『不思議な世界』）概要

第一巻（第1～18章）

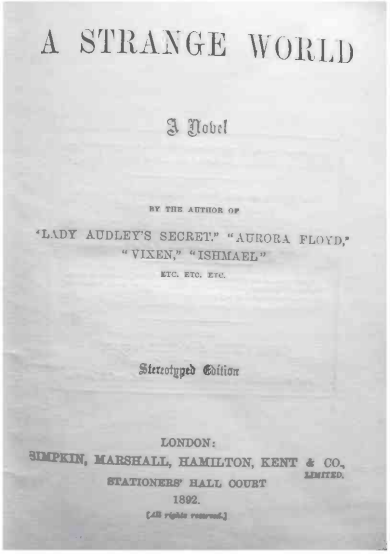
ドサ廻りの旅役者の父と娘が、寺院の町エボルシャム（Eborsham）で興行中に、若い二人の紳士に出くわす。父親はマシュー・エルグッド（Matthew Elgood）といい、50過ぎの初老の酒好きで、娘は珍しいジャスティーナ（Justina）という名の17歳の子供から大人への成長期にありがちな、青白くほっそりとした少女である。紳士の一人はコーンウォール（Cornwall）の郷士で、ペンウィン荘（Penwyn Manor）の年収7000ポンドの後継者の若殿、ジェイムズ・ペンウィン（James Penwyn）といい、まだオックス



（筆者所蔵Elizabeth Braddon, *A Strange World*（Simpkin &Co., Limited, 1892）表紙）

フォード在学の学生である。もう一人は少し年上の30歳くらいのモーリス・クリッソルド（Maurice Clissold）という若者で、ジェイムズの親友で遺産の年収400ポンドがあるので、これを基に好きな文学で成功を夢見ている。

この二人の紳士が夏の休暇中に気ままな旅の途中エボルシャムの町に逗留中に、町はずれを散歩していて、旅役者の父娘に町への道を尋ねられたことから、急速に親しくなっていく。特に若い方のジェイムズは人間がやさしくできていて、田舎者で素朴なジャスティーナの芝居を見に行ったり、親子ともども競馬に誘ったり、はては貧しい旅役者を豪勢な食事に誘ってもてなしたりしているうちに、気が付いてみると二人とも相手に恋をしていることを知り、ジェイムズはひそかにジャスティーナに求婚し、娘の方は夢のようだと思いながらも、結婚してペンウィン家の夫人になることを承諾する。運命の糸に引き寄せられるかのような、出会ってからたった二日間の短期間の出来事であった。


A STRANGE WORLD

A Novel

BY THE AUTHOR OF

"LADY AUDLEY'S SECRET," "AURORA FLOYD,"
"VIXEN," "ISHMAEL"
ETC. ETC. ETC.

Stereotyped Edition

LONDON:
SIMPKIN, MARSHALL, HAMILTON, KENT & CO., LIMITED.
STATIONERS' HALL COURT
1892.
[All rights reserved.]

（上記写真本の内表紙）

しかし果たせるかな、二人の結婚にはジプシーの予言が暗い影を落としている。エボルシャムの町でジェイムズとジャスティーナはジプシーの老婆に手相を見てもらって、ジェイムズの生命線にそれを途中で切断する別の線があることから、気を付けるように言われたのが的中し、ジェイムズがまだジャスティーナの父親に結婚の承諾を得る前に何者かに殺されることになる。

ジェイムズが芝居の跳ねた後ジャスティーナと寺院の広場を散歩して彼女の投宿先に行き、待っていたマシューや座長たちと遅い夕食を済ませた

のち、ジャスティーナがジェイムズを戸口に送り出したのが、彼女が婚約者を見た最後であった。この時、しかし、ジャスティーナは、旅籠ウォーターファウル（Waterfowl）に帰っていく婚約者の後をつけていくような怪しい男の人影を見つけ、不審に思ったが、翌日になると、婚約者が殺されたことを知らされ、夢が無残にも砕かれてしまう。

容疑者としてジェイムズの親友のモーリスが、アリバイ証言を拒否したことで拘留されるが、尋問にはジャスティーナが彼女が見た怪しい影の男とはモーリスではないことを証言して、証拠不十分ということでモーリスは釈放されるが、親友ジェイムズの喪失を嘆くモーリスは、必ず真犯人を探し出すと心に誓う。そして落胆した婚約者のジャスティーナには、今後力になると約束する。

それから一年ほど経てモーリスは亡き友人ジェイムズのコーンウォールの里ペンウィンの彼の館ペンウィン荘に旅することになるが、この館は今はジェイムズの従兄弟のチャーチル・ペンウィン（Churchill Penwyn）が、ジェイムズの死後、遺産相続をしていて、恋人のマッジ（Madge）と結婚し、マッジの妹ヴァイオラ（Viola）と共に幸せに暮らしている。

館の当主チャーチルは、ロンドンのテンプル（Temple）の独身寮で弁護士の勉強に努力奮闘していた30歳の若者であったが、金がないという理由で愛するマッジから結婚を断られていたのだが、従兄弟ジェイムズの急死で遺産が転がり込んできたのを潮に、念願の結婚を果たし、しかも館の当主に収まった後いうわけである。

初めてペンウィン館を訪れたモーリスは門番のジプシー老婆をどこかで見たようだと不審を抱く。この老婆はかつてエボルシャムでジェイムズの手相を占った女であり、ジェイムズ殺害の現場を見て知っており、その証拠となる名前入りの血の付いたハンケチも隠し持っていることから、チャーチルが密かに手元において門番に据え、監視下に置いているのであるが、モーリスはそのようなことを今知る由もない。つまりジェイムズ殺害の真犯人はチャールズ・ペンウィンなのだが、モーリスも、チャーチルの誠実な妻マッジも、そして読者もまだこの事実を知らない。

第二巻（第 19 ～ 38 章）

ペンウィンへの旅でモーリスが宿泊することになったのが、鉄道の駅のあるシーコム（Seacmb）とペンウィン荘との間にあるボーセル・エンド（Borcel End）のトレヴァナード農場（the Trevanards）であるが、トレヴァナード夫妻（Michael & Bridget）と息子のマーティン（Martin）、それに半盲目の祖母が暮らしている。農夫もたくさん雇っている豪農で、今でもペンウィン家のテナントであり、昔から館とは深い関わりのあった農家ではあるが、名門の家柄である。

ここに泊まった最初の夜にモーリスが出くわすのが、青白く痩せ細った背の高い女の幽霊である。否、これは幽霊ではなく、40 歳くらいの実在の女でマーティンの姉ミュリエル（Muriel）といい、モーリスが泊っている二階の部屋は、かつてこの女の使っていた寝室であったので、女は月夜には時々この部屋にやってきては、今は亡き恋人の名を呼んで、男の帰りを待つ狂女になってしまったことが後に判明する。ミュリエルはある時から家族と切り離されて、離れの祖母の寝室の二階で隔離された形で暮らしている。

翌日もモーリスが裏庭を散歩していると、この狂女ミュリエルに出くわし、モーリスが彼女の母の名を出すと女は突然怒り出し、自分の子供をどこに連れて行ったのかと叫んで、家の中に姿を隠してしまう。モーリスは、このトレヴァナード家には人には言えない秘密があるのではないかと勘づく。

またモーリスは日曜日に村の教会にトレヴァナード一家と参拝に出かけた時、ペンウィン館の新しい主チャーチルと妻のマッジに出会い、館に招待され、大変親切にもてなされるが、トレヴァナード夫人だけは、身分の違いを理由に決してペンウィン夫妻との交わりは持とうとはしない。そこには夫人だけしか知らない、屈折したものが心に隠されているのであるが、それが娘ミュリエルの発狂とも関わりのあるものであることが、やがてわかることになる。

モーリスはマーティンと仲良くなってボーセル・エンド周辺を馬車で案

内してもらうが、ある時シーコムの教会の洗礼名簿を見ていて、その中にマシュー・エルグッド夫妻の名と彼らの赤ん坊の洗礼名エミリー・ジェーン（Emily Jane）が記されているのを見て、びっくりし、これはひょっとしてエボルシャムの町で出会ったあの旅役者のエルグッドとその娘ジャスティーナのことではないかと思う。

ある夕方トレヴァナード一家のものが留守の時、祖母の老婆が退屈しのぎに居間に出てきて寂しいから話し相手になってくれとモーリスを自分の部屋に誘うので入ってみると、暖炉の上に女の肖像画が掛けてあって、だれかと尋ねると、老婆は、それは自分の夫の母親でジャスティーナ・トレヴァナード（Justina Trevanard）だというのを聞いて、モーリスは直ちに旅役者の娘ジャスティーナのことを思い起こす。そして教会の洗礼者名簿の名前の女性との不思議な縁を思う。

モーリスが、夜中にそしてまた裏庭で、ミュリエルと出会ったことを話すと、老婆は、恋人が若くして死んでしまってから、精神に異常をきたし、村の医者に診てもらったが、どのような薬も効力がなく、若い時の美しい姿があれほど痩せ衰えてしまったと、姪の不幸を嘆く。この時二階から降りてきたミュリエルは祖母の膝に蹲り、髪を撫ぜてもらいながら、突然子供の泣き声がすると言い出す場面にもモーリスは出くわす。

他方、第一子の息子ヌージェント（Nugent）の誕生を機に、チャーチルはシーコムから国会議員として打って出、当選する。そして植樹、道直し、所有の鉱山への新たな投資と利益の管理、有用な小作人への支援、不要な者の首切りなど、地所の大変革をやってのける。国会議員としてもその論法の鋭さで、大いに賞賛を博すようになる。

妻のマッジも、モデル村を作り、慈善学校を建てるなどして村人の人気を浚い、夫のために尽くす。ロンドン社交界の大物未亡人でマッジたち姉妹に肩入れをしているチェスハント夫人（Lady Cheshunt）が館を訪れて、このペンウィン荘はまさに「アルカディア」だと絶賛する。だが、幸せの絶頂期にありながらも、妻のマッジは時折夫のチャーチルが沈んだ様子をしているのを見逃さない。そしてやがてその原因が妻に明かされる時が来

る。

モーリスがコーンウォールを旅してから、ロンドンに戻り、一年ほどを経た頃、待望の詩集を出版して、爆発的な人気を得る。この詩集は自分の過去の失恋を基にしたフィクションの物語詩で、*A Life Picture, and Other Poems* という題で、作者は本名を明かさず、クリフォード・ホーソン（Clifford Hawthorn）というペンネームであるが、貸本屋のムーディーズ（Mudie's）では、大人気で、なかなか手に入らないほどであった。ロンドンの館では、マッジとヴァイオラの姉妹が、まさか作者が知人のモーリスだとは知らないで、この詩集を読み、批評し合う。

モーリスのこの物語詩は彼の過去の失恋が元になっているが、実はモーリスがエボルシャムで友人ジェイムズの殺人容疑で逮捕されたとき、殺人のあった夜のアリバイを敢えて証言しなかったのは、この詩に登場する恋人からの手紙で急遽彼女に会いに出かけていたからである。恋人は父の言いつけで、金持ちの男との結婚を余儀なくされるから助けてほしいという内容の手紙であったが、いざ行って見ると女は、すでに明日結婚式をする段取りだといい、モーリスは尻の軽い女に裏切られることになるのであるが、詩の中では主人公が天使のような恋人を捨てる話になっている。アリバイ証言を拒否したのは、女の名誉を思ってのことであった。

ある日、文学仲間の新進劇作家ジャック・フリッターギルト（Jack Flittergilt）の新作劇 *No Cards* を見に、連れられて王立アルバート劇場（the Royal Albert Theatre）に出かけると、その新作劇の女優が、二年前にエボルシャムで田舎芝居をしていたジャスティーナ・エルグッドであり、これが人が変わったように美しい女性に成長していて、見事な演技力を身につけて、観客を圧倒するのを目の当たりにする。あの二年前の彼女を襲った悲劇が少女を一人前の女に成長させたのだと、父親のエルグッドはいい、楽屋を訪ねたモーリスに、今はブルームズベリー（Bloomsbury）に投宿しているので、是非訪ねてきてほしいという。行ってみるとジャスティーナは、モーリスの詩集を読んで涙しているところであった。勿論その詩集の作者がモーリスであるとは知る由もない。こうしてモーリスとジャスティー

ナは再会し、急速に親密の度を増していくことになる。

さて、その後のペンウィン家であるが、折しも、門番の老婆レベッカ（Rebecca）の息子ポール（Paul）が、捨てられた母を捜してやって来て、空腹だから何か食わせろといい、ジプシーが館に雇われていることの不信を言い募り、従兄弟が殺されたおかげでチャーチルが屋敷を手に入れたことについて母が何か知っているからではないかと迫る。老婆がこれを否定すると、パーティーをやっている館を覗いてくるといって、開いている窓から忍び込んで、奥方マッジがテーブルに置いておいたダイアモンドのネックレスを盗むと、逃走しようとして、マッジの妹のヴァイオラに見つかり、居合わせた客とチャーチルに取り押さえられる。

この盗難事件をめぐって、いざ告訴という寸前に、門番の老婆レベッカが傍聴席から告訴を取り下げてほしいとチャーチルに嘆願する。だが見せしめのためにそれはできないというチャーチルに対して、では奥方のマッジに話したいことがあるといって、隣室に行き、十分ほどすると、真っ青な顔をしたマッジが出てきて、それまで告訴を主張していたのを翻し、夫に告訴を取り下げるように嘆願する。チャーチルは隣室で何が話されたのかを察知すると、妻のいうことを聞きいれて、傍聴席が唖然とするうちに、告訴を取り下げ、謹慎を申しつけたのみにて、裁判は結審する。

勿論、ジプシーの老婆がマッジに語ったのは、読者も推察の通り、夫チャーチルによる従兄弟ジェイムズの殺人の現場を目撃したという話であった。夫が彼女の結婚のための条件を満たすために殺人を犯すに到ったことを知ったマッジ夫人は、その罪の半分は自分にも責任があることを悟り、いまだもって神に懺悔することのできない夫を責めることなく、心の中で自らが仲介として神に懺悔をする。そしてその罪ゆえ、チャーチルの心は蝕まれていき、その伴侶となったマッジの美しい容貌は次第に衰えていくことになる。

一方、モーリスはロンドンの劇場で名声を博していくジャスティーナと父のエルグッド氏の投宿先をしばしば訪れては、娘には文学の教養を深める話をしてやり、飾り気のないその部屋を本や茶器や花瓶、彫刻などで

飾ってやる。エルグッド氏にはコーンウォールのシーコムの教会で偶然見つけた洗礼名簿の名前について尋ねると、それはジャスティーナではなく、生まれて六週間で亡くなった彼女の姉だという。さらにモーリスがジャスティーナという変わった名前に言及し、その名前の持ち主がボーセル・エンドのトレヴァナード家の曾祖母の名前であるというと、エルグッド氏は仰天するが、その家のことは噂で聞いただけだと白を切る。モーリスは彼が何かを隠していると察知する。

娘のジャスティーナは相変わらず亡き婚約者のことが忘れられないようで、彼からペンウィン家を奪い、裕福に暮しているチャーチルを赦してはいない様子である。そこでモーリスは彼女を連れ出してはよくロンドンの美術館やハイド・パーク（Hyde Park）を散策するようになり、次第に自分のクラブには立ち寄らなくなる。夜帰ってからは、これまで以上に純粋に詩の創作に没頭するようになるが、ジャスティーナにはまだ彼女の好きな詩人が自分であることは明かさないで、自分の人格のみで彼女を手に入れようと思う。

マーティン・トレヴァナードと別れて二年の歳月が経ったとき、突然彼から母の容体が悪いので来てほしいという手紙を受け取ると、モーリスは詩の創作に没頭し、またジャスティーナと別れるのが辛い時ではあるが、友人の悲しみには勝てず、すぐさまボーセル・エンドに向かう。特にマーティンがモーリスを呼んだのは、彼の母が家族の者には言えない何か――恐らく娘のミュリエルに関することかもしれない――を心に秘めていて、それが彼女を弱らせているようなので、よそ者ではあるが信頼できる紳士のモーリスになら話すかもしれないから、訊き出し、何か正すことができるものがあるなら、それをやってもらいたいという依頼のためであった。トレヴァナード氏からは、最近ペンウィンであった泥棒の話を聞かされ、なぜチャーチルが細君の嘆願を聞きいれて突然門番の息子である盗人を釈放するに至ったかを不思議に思う。

散歩の途中ペンウィン荘に足を向けたモーリスは、門番の女がかつてエボルシャムの牧草地でジェイムズの手相を占ったジプシーだと確信するが、

老婆はこれを否定する。モーリスはチャーチルがこの女をここに住まわせたのには、訳があることを直覚し、その訳を探ってみようと思う。館までの道が整備されているばかりでなく、館そのものが見事に改装され、居間は客の楽しさにあふれる光景に満ちていることに気づくが、モーリスは特にペンウィン夫人マッジの変わり様に目を奪われる。輝く肌の色は失せ、顔も角張り、目も大きくなって、鋭くなったように見え、話す声の調子にも、かつての楽しげな響きが失せてしまったように思える。

第三巻（第 39 ～ 55 章）

以降、物語はモーリスがトレヴァナード家の秘密を知り、それが深くペンウィン家と関わっており、さらにこれにはジャスティーナの出生の秘密が隠されていることを突き止める間、これと並行してチャーチル・ペンウィンの悪事が暴かれ、ペンウィン家が没落していく必然の過程が、見事な推理の組み合わせを通して展開されていく。

娘ミュリエルのことで心を痛めているトレヴァナード夫人に同情するモーリスは、夫人からミュリエルに関する秘密を聞くことになる。それは次のような話であった。

ミュリエルはシーコムの女学校時代に可愛がられた校長先生のミス・バーロー（Miss Barlow）から、ミクルマスの期間二週間学校に泊まりに来てほしいという招待状を受け取ると、父母の承諾を得て、喜んで出かけたが、二週間の滞在をさらに一週間延長して、三週目になって元気で戻ってきたが、時折発作的にふさぎこむ様子が見られるようになった。そしてペンウィン家の長男で後継者のキャプテン・ジョージ・ペンウィン（Captain George Penwyn）が連隊に加わってカナダに立った頃は、落ち込んでしまった。

ある日ミュリエルは母親に妊娠していることを告げるが、相手の名前も言わなければ、秘密の結婚なのかどうかも言わない。驚いた母親は祖母と相談のうえ、ミュリエルを祖母の寝室の二階に隔離し、そこで母屋とは離して生活させ、家の者には気づかれないようにした。ある冬の日エデン夫妻（Mr. & Mrs. Eden）と名乗る若い夫婦が雪のために立ち往生し、助けを

求めたので、トレヴァナード夫人は哀れと思い、二人を乾草小屋に泊めてやることにした。話を聞くと、この夫婦は最近赤ん坊を亡くしたばかりだという。

この話を聞いたトレヴァナード夫人は妙案を思い付き、雪の降り積もる間のみならず、春になるまでこの若い二人を乾草小屋に密かに住まわせ、家の者には内緒で食事を運んでやった。若い母親は元気を取り戻した。そこでトレヴァナード夫人は亡き子どもの代わりに「母のない子」(“motherless child”)を一人育ててくれまいかというと、エデン夫妻は喜んでこの依頼を引き受け、春暖かくなった早朝に立ち去って行った。ミュリエルは産褥の熱でしばらくは弱っていたが、気がついて自分の赤ん坊がいなくなっていることを知ると、気が狂ったようになるが、母親が訳を云い聞かせ、人に育ててもらうようによそにやったと話すと、ミュリエルも心を静めてこれを受け入れるようになった。

だが、ある時父親のマイケルが何も知らず、カナダに行ったキャプテン・ジョージ・ペンウィンが原住民に殺されたことを告げると、折角回復しかかっていたミュリエルの頭は狂ってしまった。そこで祖母の二階に隔離するようにして、これまで暮らしてきた。トレヴァナード夫人は語り終え、心の痞(つか)えをおろす。

この話を聞いてモーリスは、エデン夫妻というのはエルグッド夫妻のことであり、その娘ジャスティーナこそはミュリエルの娘だと半ば確信する。その後すぐトレヴァナード夫人は容体が悪化し、モーリスを呼んで、「聖書…あげた…家族用聖書を」といって息を引き取る。「家族用聖書」に謎を解くカギがあるものと思うモーリスは、それをマーティンから借り受けて調べてみるが、トレヴァナード家の家系が記してあるだけで、ミュリエルの子どものことは何ら記されてはいない。この聖書の中にミュリエルがミルトンの詩を引き写した紙片が挿入されているのを見つけ、モーリスは彼女の筆跡証明のために、貰い受ける。

この大型の家族用聖書のほかに「家族用聖書」と呼ばれる聖書がないかどうかをトレヴァナード夫人の遺品の中に捜していたモーリスは、夫人の

最後の言葉に「あげた」という言葉があったのを思い出し、彼女が告白の中で、赤ん坊を旅人に託するとき、聖書に誓わせたといったことからも、きっとその聖書はエンデ夫妻に形見としてやったに違いないと推理する。そしてその聖書にはマーティンの曾祖母ジャスティーナの名が書いてあったというから、ジャスティーナ・エルグッドというのはミュリエルの娘に違いないと確信する。自分が愛するようになった娘ジャスティーナをめぐるこうした謎は、まさにモーリスが解くべき「宿命」(Destiny) と思われ、彼は謎の解明に本格的に取り組むことになる。

ロンドンに帰る前に、モーリスは別れを告げにペンウィン荘にチャーチルを訪ね、なぜ従兄弟の占いをしたことがあり、またその息子が泥棒をしたというジプシーを門番として雇っているのかを尋ねる。チャーチルは、貧しい女を哀れと思い住まわせている、追放するような酷いことはできないという。だが、モーリスは、その老婆の予言のおかげで金持ちになってこの館に暮らしているチャーチルが、その女を門番として住まわせていることに疑惑を抱かざるをえない。

この館でモーリスが確信したことが二つある。一つは小さな書斎に掛っているキャプテン・ジョージ・ペンウィンの肖像画が語っているのは、まぎれもなくジャスティーナは彼の娘だということである。ジャスティーナは彼の生き写しであった。初めてこの館を訪れて、家政婦のダーヴィス夫人に案内されてこの肖像画を見た時は、ジャスティーナの顔をうろ覚えにしか覚えていなかったので、それほど強く印象に残らなかったが、今や自分の恋人となった女の顔の記憶は確かであった。

もう一つは、同じ書斎にジョージが大学より持ってきた文学書があり、彼の教養の高さを証するものであるが、その中のバイロン詩集の中に女文字で適切な評が書きこまれているのを発見し、これはミュリエルの筆跡であることを知るモーリスは、ジョージの愛読書にこうして書き込みをする二人の関係が物語っているものを確信する。

ジョージ・ペンウィンについての人の噂をヴァイオラから聞いたモーリスは、ジョージが立派な紳士であり、ミュリエルを裏切る男ではないと確

信する。ではどうして生まれてくる子どものことが予測できたはずなのに、ミュリエルに何の保証も与えないでカナダに行ってしまったのかという謎が残る。この謎を解くためにモーリスは、ミュリエルが女学校時代を過ごしたシーコムの町に立ち寄って、昔の校長ミス・バーローの行方を突き止めようとする。

シーコムの古い旅籠の女将チャドウィック夫人（Mrs. Chadwick）にミス・バーローのことを訊ねると、彼女の女学校は淑女を対象にした位の高い学校で、その中でもミュリエルはとびきりの少女で、若者の憧れであったが、学校を卒業してまもなく頭が変になったと聞いているという。またミス・バーローに関しては、女学校を閉じてからは大陸に行き、勉強をして帰国すると、ロンドンでピアノの教室を開いたと聞いているという。さらにシーコムでの芝居について尋ねると、それは散髪屋の主人クリップカム（Clipcome）がよく知っているというので、モーリスは散髪屋を尋ねてみると、はたしてクリップカムは芝居のことなら何でも知っていて、エルグッドという役者とその妻が隣の仕立屋に下宿していたが、劇場が閉鎖してしまい、下宿を追い出されて、雪の降る寒い日にこの町を去っていったという。最後にエルグッドが芝居に出た時のポスターの日付は、1849年1月10日とあった。

再びシーコムの教会で洗礼者名簿を確認したモーリスは、同時に死亡者名簿を調べると、そこには1849年1月4日の日付で、エルグッド夫妻の娘エミリー・ジェーンが生まれて五週間のちに死んだことが記されていた。これはシーコム劇場が閉鎖されてから六日目であった。モーリスはジャスティーナが自分の誕生月が5月であるといっていたのを思い出し、エミリー・ジェーンの誕生が1848年12月であるから、翌年の5月にジャスティーナが生まれることの不可能なことを知り、ジャスティーナはエルグッド夫妻の子どもではないと確信する。

ロンドンに戻ったモーリスは、早速この事実をすべてエルグッド氏に話すと、エルグッド氏もこれを認め、トレヴァナード夫人から生まれたばかりの赤子を託され、養育費として貰った200ポンドを懐に、シーコムから

列車に乗り込んで、サマセットシャーのスローベリー（Slowberry）にあるシアター・ロイヤルという劇場の支配人の契約をするが、営業はうまくいかず、貰った金も底をついてしまい、おまけ最愛の妻も亡くし、あとはまたあちらこちらと幼い娘を連れて流れ歩いたという。スローベリーに着いてすぐに、洗礼を行い、貰った聖書に書いてあったジャスティーナ・トレヴァナードから娘の名を付けたという。

次にモーリスはロンドンの郵便名簿を調べ、バーロー（Barlow）という名のすべてに当たるが、ピアニストのバーローは見当たらない。それでジャスティーナの劇場の楽団指揮者に尋ねてみると、マダム・バーロー（Madame Bâlo）という女性なら知っているという。これはイタリア留学の頃の呼び名であろうと推測して、早速尋ねてみると、60歳になった当のミス・バーローが姿を現し、ミュリエルは最愛の生徒であったこと、ジョージ・ペンウィンに頼まれて密かにデヴォンシャー（Devonshire）のディドマス（Didmouth）というところの教会で自分が立ち会って結婚式を挙げたことを話す。だがその後ミュリエルがジョージの死を機に頭がおかしくなったことは知らない。

そこでモーリスは、さらに証拠固めをするべく、ディドマスに出向く。教会に行き、結婚式の記述簿を見せてもらうと、ミス・バーローの証言通り、1847年9月30日と記されていた。その足でモーリスはボーセル・エンドに赴く。そしてマーティンと祖母のトレヴァナードにミュリエルに関する事実を打ち明けると、マーティンは姉の娘の存在に有頂天になり、祖母はミュリエルが不義の娘ではないことは信じていたといい、母親の犯した過ちを嘆く。

モーリスはきっとミュリエルを気遣う手紙をジョージがカナダから送ってよこしたものがあるに違いないと思い、その手掛かりを得ようと、ミュリエルがまた彼の泊まっている寝室に忍んで来るのを待つ。果たせるかな、三日目の月夜に、ミュリエルはやって来て、ささやき声で、窓の下のジョージに気を付けて上がって来るのよと呼びかける。そしてテーブルの上に置いてあったロウソクに火をつけると、部屋を出ていくので、火事に

なる危険を察知したモーリスが跡を付けると、屋根裏部屋に通じる狭い梯子段を上っていく。屋根裏部屋でミュリエルが捜していたのは、まさにジョージからの手紙であった。それをミュリエルはベビーベッドの中に隠していたのだ。それを取り出して読む姿を陰に隠れて見ているモーリスに気付いたミュリエルは、亡き夫ジョージの亡霊が帰ってきたと思いこみ、ロウソクを捨てて、モーリスにしがみつく途端、彼女の寝巻に火が移って、燃え上がるのを消し止めたモーリスは、失神したミュリエルを抱きかかえて、祖母の部屋に連れて行き、医者を呼んで、看病を依頼する。

翌朝モーリスは屋根裏部屋に上がって、ミュリエルが読んでいた手紙を探し出す。それはジョージがミュリエルを妻と呼び、帰国したら父にも承諾を得て、必ず結婚を公にするという内容で、もし困ったことがあれば、シーコムの某弁護士に相談するようにといって、その弁護士宛ての手紙も同封してあった。だが、封が開けられた形跡がない。トレヴァナード氏に尋ねると、この弁護士は1842年12月に旅先で亡くなったことが判明し、ミュリエルがその手紙を弁護士宛てに送らなかった謎が解ける。

こうしてモーリスはジャスティーナがペンウィン荘の後継者としての証拠のすべてを入手した。ロンドンに戻ったモーリスは、ジャスティーナがエルグッドの実の娘ではないことを話そうとするが、エルグッドが先に自分はお前の法的な父親ではないといい、娘を驚かせる。モーリスはチャーチルを告訴してペンウィンの家屋敷を彼から剥奪し、正当に継承するかどうかを訊ねると、ジャスティーナは、そのような酷いことはしたくない、ペンウィンの屋敷はそのままにしておいて、ペンウィンの名前の継承と、身代の半額のみを貰えばよいという示談を提案し、これをチャーチルに示して了解を得てほしいという。

こうした了解のもと、モーリスはやっとジャスティーナに対して、深まりゆくロンドンのセント・ジェイムズ・パーク（St. James Park）を散歩しながら、これまでわざと伏せていた愛の告白をすると、ジャスティーナは驚いて、あなたは私には気がないのかと思っていたといって喜び、二人は結婚の約束を交わす。

再びボーセル・エンドに取って返したモーリスは、ミュリエルの火傷が大したことはなくて、快方に向かっていることを確かめると、娘に遭わせてやると約束する。だが、ミュリエルは、歳月の感覚がなく、赤ん坊のままの娘に遭いたいという。トレヴァナード氏にも、奥方が家名を守るためにミュリエルとその子どもを犠牲にしたことのすべてを話すと、氏は妻の狭量な世界が生んだ悲劇だといい、打ち明けておれば、きっとミュリエルとその子を世間から守ってやったであろうと、二人のこれまでの不幸を嘆く。だが、ミュリエルのためなら、たとえ踊り子であろうと、孫を愛するという。

モーリスは書斎にいるチャーチルを訪ね、ミュリエル・トレヴァナードとジョージ・ペンウィンの子どもジャスティーナが館と財産の真の後継者であり、それを証明する結婚証明書と立会人、ジョージから妻宛ての手紙、シーコムの弁護士への依頼状などの存在について語る。そして自分はジャスティーナの依頼を受けて、法律に訴えて地所を手に入れるつもりはなく、財産の公平な分配を希望しているので、それに同意してほしいという提案をする。だがチャーチルはこれを撥ねつけ、モーリスを詐欺師と呼んで、館から追放する。

モーリスが帰った直後、書斎の扉が開いて、すべてを立ち聞きしていた妻のマッジが入って来る。机に蹲る夫を抱きしめながら、これを機に地所と財産のすべてを新しい後継者に譲るように夫に嘆願する。だが、チャーチルは、罪を犯してまで得たものをすべて詐欺師に手渡すことはできないといい、あくまでも控訴して戦うという。だが、マッジは今度だけは夫の言いなりにはならず、財産を取るか私を取るか二者択一をせよと迫る。

だが、チャーチルはすぐさまロンドンの弁護士パーガメントに会って、訴訟を起こされた場合の準備をするように命じ、どうしても勝つためには「平気で悪事をする」（“unscrupulous”）ような連中の手を借りよとも指令する。こうしておいて館に取って返すと、門番のジプシーが高熱でうなされ、殺人のことを喚くのを、必死で抱きしめて看病しているマッジの姿を見つけ、二人で看取ってやると、朝方死んでしまう。枕の下に自分の名前入り

の血の付いたハンケチを見つけたチャーチルはこれを密かに暖炉で処分し、殺人の証拠を消してしまう。

看病に疲れ果てたマッジの顔をまじまじと見たチャーチルは、はじめてその顔が驚くほど精気がなく、やせ衰えているのを知り、妻に齎した気苦労が彼女を衰弱させてしまったことを知る。それで、チャーチルは、妻がそうしたいのであれば、すべてを放棄する、館も財産もすべて新しい後継者に譲って、自分たちはシドニーに行って、新たな人生をはじめてもよいという。これを聞いたマッジはこれまでの心の重荷が取れたようになり、そうしてほしいといい、それでこそ自分の愛する夫だという。

早速手紙を書いて、チャーチルは、ロンドンの弁護士には、後継者が本物であると分かれば、控訴しないで譲渡の手続きをするように命じ、銀行には、預金の2000ポンドのうち600ポンドでカナダの公債を買い、400ポンドを現金で送り届けるよう指示し、シドニー行きの船の予約をする。マッジは息づかいが荒く、熱がある様子なので、チャーチルはすぐさま医者を呼びにやり手当てをするが、一向に良くならない。

一方、火傷から回復したミュリエルは、すべての事情がわかった家族の居間に再び姿を現し、弟マーティンや父に看病されるようになる。ロンドンに帰ったモーリスは、すぐにミュリエルの住まいをロンドン近郊に捜して、マーティンに姉を連れて来させ、実の娘ジャスティーナとの再会を果たさせる。だが、大人になった娘をわが子だといわれても、ミュリエルは納得しない。ロンドンの医者は診察ののち、ミュリエルが正常な状態に戻ることはないが、現在の「穏やかな」(“gentle”) 状態のままでいることはできるという。

ジャスティーナは、昼間は母の世話をし、夜は舞台に立つという生活を始める。モーリスが訴訟を依頼していた弁護士は、チャーチルの弁護士から地所も財産もすべて後継者に譲渡し、控訴はしないといってきたことをモーリスに話すが、ジャスティーナは従兄弟のチャーチルから家も財産もすべて奪うようなことはしたくないといい、自分でチャーチルに妥協を提案する手紙を書くという。

マッジは二週間に及ぶ懸命の看病にもかかわらず、夫に抱きついて、満足の吐息をつくと、死んでしまう。チャーチルはペンウィン家代々の石の廟にではなく、風が吹き海の見える草原の墓地に妻を葬ってやる。そしてすぐにお前のもとに行くからと、密かに亡き妻の墓前で誓う。一方、ジャスティーナから届いた手紙にチャーチルは、地所や財産はすべて渡すが、息子だけは、出来れば紳士に育ててほしい、そして妹のヴァイオラと義父サー・ヌージェント・ベリンガムを息子の後見人にしてほしいという短い返事を書く。

これで思い残すことがなくなったチャーチルは、馬小屋に行き、気の荒い愛馬ターパン（Tarpan）を引き出すと、拍車の付いた靴を履いて、これに跨り、草原を駆け抜けると、岬の崖まで行く。夕日の沈んだ水平線を見やりながら、これまでの人生を振り返り、自分の人生はチェスの駒を急いで動かしたようなもので、一時は勝っても、やがてはすべてを失うことになる手を打ってしまったと思う。「自分が運命を支配する唯一の道は、時を得て、運命との戦いに自ら終止符を打つことだ」（“a man has but one power over his destiny —— power to make an end of the struggle at his own time.” 378）という最後の言葉を残して、愛馬ターパンにもうひと駆けさせ、向きを変えると、拍車を蹴り込み、断崖めがけて一目散に駆け去っていった。

翌日崖下に馬とともに砕かれたチャーチルの死体が発見され、妻の死で頭の混乱したチャーチルが、薄暗い霧の中で道を誤り転落死したと思われ、マッジの墓が再度開かれ、チャーチルは、望みどおり、妻と一緒に埋葬されることになった。

ジャスティーナはチャーチルの申し出を考慮して、息子のヌージェントから屋敷を取り上げることはせず、ヴァイオラを乳母としてそのまま置いてやり、自らはペンウィンの鉱山からあがる3,000ポンドの年収のみを得ることにした。そうして舞台を惜しまれながら去ると、9月のある朝、ブルームズベリーの教会でモーリスと結婚式を挙げ、ドーヴァー経由でローマへの旅に上った。このときになって初めてモーリスはジャスティーナの愛読

の詩集の著者が自分であることを明かし、ジャスティーナの名前をモノグラフにして詩集の留め金にしたものを、結婚指輪の代わりに贈った。

結婚後三年を経て、モーリスの詩人としての名声はさらに高まり、夫妻はミュリエルが静かに暮らすボーセル・エンドの近くにスイス風シャレーを建て、夏の別荘にして暮らすようになる。ペンウィンの館からは、ヴァイオラが小さなヌージェントを連れてよく遊びに来るようになり、マーティンはヴァイオラと親密の度を増していきながら、地元での農場の改善に力を尽くすことになる。ヌージェントの後見人の一人サー・ヌージェント・ベリンガムも時折は孫の顔を見にやってきた。この頃になると、モーリス・クリッソルド夫妻は自分たちの子ども部屋を建て、夫妻の乳母と子どもたちは館からやって来るヌージェントと乳母役のヴァイオラと、大の仲良しとなった。

こうして、結婚した若者、子ども、そして恋人にとって、幸せな夏の日が続いた。青春と愛と深い満足の甘美な季節であった。

Ⅱ．涙香小史譯述『人の運』――原典との相違を中心に

まず登場人物の原名および地名とそれに対応する日本語名の一覧を挙げ、続いて原典との相違点を詳述する。

筆井清（筆井家の若殿）―― James Penwyn
栗田廣夫（清の友人）―― Maurice Clissold
川岸弁護士（栗田の弁護士）―― Dr. Hillyard
江木茂（旅役者で楓の義父）―― Matthew Elgood
園田（旅役者江木夫妻の別名）―― Mr. & Mrs. Eden
江木楓（芸名、花山花子、旅役者）（筆井家の後継者で、のち栗田夫人）―― Justina Elgood（Justina Penwyn / Clissold）
筆井淡（清の従兄弟で、清の殺害者）―― Churchill Penwyn
米村松子（淡夫人松子）―― Madge Bellingham（Madge Penwyn）

大磯弁護士（筆井淡の弁護士）―― Mr. Pergament
筋川弁護士（悪徳弁護士）―― Mr. McStinger
鳥庭夫妻―― Mr. & Mrs. Trevanard
鳥庭の老婆（祖母）―― Old Mrs. Trevanard
鳥庭柳子（長女）―― Muriel Trevanard（Muriel Penwyn）
筆井深（筆井家の長男で清や淡の叔父）―― Captain George Penwyn
漣夫人（シーコムの音楽学校の校長、別名小田夫人）―― Miss Barlow（Seacomb の女学校の校長、別名 Madame Bâlo）
筆井家家番麻村夫人―― gypsy Rebecca
捨吉（家番の息子）―― Rebecca's son Paul
エボルシャム―― Eborsham（York の古名と思われる）
コルニシ地方―― Cornwall
シーコム（シイコム）―― Seacomb

＜初篇＞

エボルシャムの郊外、二人の若い紳士筆井清と栗田廣夫が、旅の役者江木茂と娘楓に出会って、そろってエボルシャムの町にまで徒歩で帰り、その途中で清が女占師の老婆に手相を見てもらい、短命の相があるといわれる。

（天理図書館所蔵涙香小史譯述『人の運』後篇表紙）

その夜、楓の出る芝居を見に清と栗田が出かけ、清は江木父娘と座主夫

婦を夕食に自分の泊まっている旅籠に招待し、楓とは夕食ののち庭で夜中まで話をし、一行を清が彼らの投宿先に送って行って旅籠に帰ってくると、清があまりにも楓に馴れ馴れしくするのを栗田がとがめだてしたことで口喧嘩となる。翌朝、清が江木父娘と座主夫婦を仕立てた馬車で競馬場に連れて行くのに、栗田は釣りに行くと書置きして、同行しない。

競馬場での楽しい昼間を過ごした時にも、昨夕出会った女占いが再び近づいてきたので、清は金を与える。夜は楓の芝居に出向き、芝居の跳ねた後は、江木茂と座主夫婦と一緒に夕食をとる前に、出会ってまだ二日しか経たないけれど、清は楓の中に自分の理想の女性像を見出し、結婚を申し込んで、コーンウォールの筆井郷の後継者である自分の妻にすると約束する。そうして一同夕食ののち、清は一人泊っている旅籠に帰るのを楓が見送るが、その時清の後をつけているような不審な男の姿を、楓は目撃する。

翌朝芝居の稽古をしていると、そこに江木茂が筆井清が昨夜殺されたという報せを持ってくる。楓は清との婚約を父にも話していないので、一人清の死を思い涙にくれる。

一方、筆井清の従兄弟に筆井淡という男があって、貧乏弁護士だが、彼にはロンドン郊外に住む貧乏貴族の娘米村松子という恋人があり、彼女と結婚したいと思うが、貧しさゆえこれが受け入れられない。そうしたところに清が殺されたので、突如コーンウォールの筆井家の身代、年収6,000ポンド（数百万円）の後継者となり、貧しさから脱却でき、愛する松子とも結婚できることになる。

この辺りまでは、話の前後入れ替えはあるが、大体原典の筋の展開に従っている。だが、筆井清が殺された後から、訳者が原典にはない創作部分の挿入や、筋の展開を始める。

＊例えば、（訳第17回）では、栗田が清殺人の容疑者として裁判で取り調べを受け、「証拠不十分」で釈放された帰り道で、ある男がぶつかってきて、懐に紙切れを入れていくという事件がある。だが、これは原典にはなく、訳ではその書付に記してある場所に行ってみると、乞食のような男が姿を現し、清殺害の血の付いた犯人の名前を刺繍したハンケチを証拠の品

として取引に応じるように要求してくる。だが、この男は自身ハンケチを持参していないので、栗田がその男を捕まえて警察に連行しようとすると、男は逃げ去ってしまうという一幕が挿入されている。

この男は実際に殺人現場を見た女占いの実の息子だが、原典では女占いが殺人者の筆井淡自身に接触を試みて、談判の末、筆井家の門番に雇われるということになるのを、訳者はその息子を登場させ、栗田にハンケチを売りつけようとして失敗させている。この時栗田は、この男から自ら目撃したわけではないが、殺人の経緯を聞かされて、淡への疑念を抱くようになる。

＊それから一年経て、栗田は亡き友人清の実家筆井郷の筆井家を訪ねてみたいと思い、旅に出るが、原典ではこの館を栗田が訪れるのは初めてであるが、訳では清の生前に何度も訪れたことがあると変更されていて、今度新たな後継者となった筆井淡の手でずいぶんと都会風に改装された様子を目にすることになっている（第21回）。ここでも訳本では、筆井家の門番は70歳位の老人となっていて、門番とは別に家番というのがいて、これが清の女占いで、殺人の現場を目撃した老婆というような変更が加えられている。原典では、館の入り口の門番小屋に住んでいるむさくるしいジプシー女（原典のママ）こそが門番で、家番というのは、筆井家に代々仕えている家政婦となっている。なぜこのような変更を役者が加えたのかは不明。むしろ原典の方が自然に思える。

＊つづいて、栗田が筆井郷での宿泊場所として、かつて筆井家の家扶をしていた大農場の鳥庭家にまで案内してもらうのが、原典では門番の女ジプシー（原典のママ）の孫娘であるが、訳本ではこの孫娘は終わりまで登場することはなく、門番にされている老人である。また原典では鳥庭家には一人息子のマーティン（Martin）がいて、栗田（Maurice）を案内する役を務め、親友になるが、このマーティンに相当する息子は、訳述ではすでに七歳の時に亡くなったことされて、物語の後半で少し言及されるのみである。

鳥庭家の二階に泊められた栗田の寝室に夜半に幽霊のような女が現われ、

窓を開けて月夜に向かい、咽び泣きながら、恋人の帰りを待つ場面は、原典通りであり、これが色刷りの挿絵を付されて、初篇の口絵を飾っている（第23回）。これが鳥庭柳子という40歳位の幽霊の正体で、長男で後継者であった筆井深と秘かな結婚式を挙げて、子どもを産むが、母親が家名の誇りを守るために、その子どもを旅の途中で立ち寄った若い夫婦に託し、金も与えて立ち去らせた結果、発狂することになる哀れな女性である。こうした設定は訳本も原典を踏襲している。詳しくは、原典の梗概を参照されたい。

（天理図書館所蔵涙香小史譯述『人の運』初篇口絵）

＊ロンドンの劇場で、楓が花山花子と名乗って登場する場面では、原典と違って訳本では、花山花子という名もさることながら、栗田の詩集を劇にしたものを花子に演じさせている。その詩集の内容も、原典にはない、ミュリエル（Muriel）を題材にした「狂婦人」（翻案のママ）で、この狂婦人、つまり実の母柳子を、それと知らずに娘楓が熱演するという仕掛けになっている。この芝居を見た栗田は、二人の類似に驚き、その結果その類似の謎を解くべく奔走することになる。

＊ダイヤモンドネックレス盗難の裁判の後、館に帰るとき、原典ではチャーチルは妻マッジと一緒に馬車で帰るが、訳では淡は馬車の後について自分の馬に乗って帰る。些細な相違のように見えて、これは作者の見解の相違を表明している。原典では、夫が殺人者であるという事実を知ったマッジは、ショックに打ちひしがれているので、夫を自分のそばにとどめ置きたいがため、一緒に馬車で帰ってくれと嘆願する。夫も妻の衝撃を

知って、これを宥めるべく、妻に寄り添う。ここに原典における夫婦間の深い愛情が示唆されている。一方、訳本では、そのような人間的な深い感情は取捨されて、訳者の筆は、まさに殺人や謎解きという推理の方に急激に傾斜していき、深い文学性を失っていく（第36回）。

＊盗難裁判の時、「血の付いたハンケチ」まで、家番が松子に見せた（第37回）というのは、原典にはない。

＊花山花子が幽霊夫人を演じていると江木茂に言われるまで、栗田はそれに気づかないという部分は、原典にはないし、そもそも原典でジャスティーナが演じているのが幽霊夫人だという説明はどこにもない（第38回）。

＊また、栗田が幽霊夫人柳子とそれを演じる花子があまりにも似ている点を心にとめ、これを不思議に思い、謎を深めるというのは、やがて母と娘の結びつきへの重大な展開の結節点として重要だが、これは原典にはない。また訳者が両者の似かよりに、柳子と楓の人生の類似を仕組んでいる——柳子は夫を死なせ、楓も約束の夫を死なせている——点は工夫が利いている（第40回）。さらに、鳥庭家で見た「楓女の像」（曾祖母の肖像画）との繋がりについて栗田に考える契機を提供している。

＊原典ではモーリスが教会に行き、楓の出生を洗礼名簿に見るが、栗田はシーコムの役所に行き、これを尋ねている（第41回）——「旅役者江木茂　其妻安子」とあるが、出生の女児は「芳子」とあり、楓ではないことに気付く。このあと栗田は寺に行って命名帳を検めるが、芳子の出生の記録はなく、逆に死亡が記録されているという原点への変更が加えられている（第42回）。

＊鳥庭家の柳子の弟は、訳本の中では小さなころに亡くなったものとして処理され、原典のように栗田を案内する役割とはなっていない（第45回）。

＊柳子は自らこれから生まれてくる子を密かに他国へやってくれと母に嘆願するが（第47回）、原典では母が無理やり家の名誉を守るため生まれた赤子を旅人にやってしまう。訳本では、この旅人の名は園田と名乗った

と鳥庭夫人は話す（第48回）。

＊鳥庭夫人が栗田に語る柳子の赤ん坊を旅の夫婦に託した一件は、原典の通り。訳本『人の運』初篇（第50回）は、この鳥庭夫人が柳子の赤ん坊を旅の夫婦に託して旅立たせたところまでで、次の柳子の隠している夫筆井深のアメリカ（原典ではカナダ）での死の訃報については、後篇で述べられる。

＜後篇＞

＊鳥庭夫人の柳子をめぐる告白は筆井深の死の話をもって終わる（第51回）。

＊鳥庭夫人が臨終の際に栗田に「聖書を――此家に傳はる聖書を――與へ――」というのは、原典通り（第53回）。

＊家伝の聖書の中に挟まれていた紙片に、詩二、三篇を柳子が写したものがある。筆井深の所有していた詩集の中には、バイロン詩集への柳子の書き込みがあること（第54回）、また書斎の絵画の中で、深の肖像画が柳子の顔にそっくりであることへの言及（第55回）、これらは原典に忠実に従っている。

＊シーコムで理髪店の主人から昔の演劇と役者江木（園田）茂のことについて、鳥庭夫人が語ったのと同様のことを栗田は聞く。またロンドンに帰って栗田が江木老人に事の次第を伝え、老人から楓が貰い児となったことへの承認を得、楓と結婚してもよいという承諾を得るのは、原典通り（第56～59回）。

＊音楽教師漣夫人（Miss Barlow）が名を変えて、小田夫人（Madame Bâlo）となっていることを突き止めるのは、原典では栗田であるが、訳本では江木茂である。

＊小田夫人のもとへ行き、柳子が深とヂドムゥス（Didmouth）の寺で密かに結婚式を挙げたのに立ち会ったのは漣夫人と牧師であったことを確かめた栗田は、その婚姻の登記簿の写しを取り、江木老人とも相談のうえ、筆井淡に屋敷を抵当にして、楓に百万円を用意させ、屋敷の権利は残して

おいてやるという示談を考える。そしてその交渉に栗田が淡のもとに出かけていくという筋書きは、ほぼ原典の通りである（第62～64回）。また栗田が示談のため淡を尋ねて面会する書斎や、その時の淡の驚いた表情などは、原典そのものをよく写している（第64回）。さらに栗田の持ち来った仲裁を詐欺だといって全く認めず、追い返す淡との面談の場面、その場面の二人のやり取りをドアの陰で聞いてしまう松子夫人の存在も、原典に忠実である（第65～66回）。

＊松子夫人は栗田の話を立ち聞きしていて、栗田が帰るとすぐ夫の書斎に入ってきて、これを機に家屋敷財産をすべて正当な相続人に譲って、罪の償いをすべきだといい、夫がどうあっても家屋敷財産を手放さないというと、では家屋敷か私かいずれかを選べと決然として二者択一を迫る場面（第67～68回）も原典を忠実に写し取っている。

＊妻松子の留めるのも聞かずに、ロンドンの大磯弁護士のもとに行き、訴訟を受けて立つ用意をするよう申し付け、悪代言人の筋川（スチンゲル）を使って、何をしてでも勝訴に持ち込むよう命じる。だが、大磯弁護士から、そのような悪徳代言人を仲間に入れるなら自分は降りるといわれ、淡は表面上はこれを承諾する――ここまでは原典通り――だが、裏では密かに筋川に連絡を付けて、賄賂を用い、何をしてでも勝訴に持ち込もうとして、筋川の事務所を訪ねる。先客があり、筋川とある証拠をネタにある大金持ちを強請（ゆす）る算段をしている最中であった（第69～71回）。この後の方は、まったく原典にはなく、この辺りから物語の最後まで、訳者の全くの創作が展開される。その発端が、この悪徳代言人筋川との関わりである。

＊栗田は家代々の川岸弁護士に訴訟の依頼のため、一部始終を話し証拠となるものを示すが、川岸弁護士は、筋道の正しい訴訟ではあるが、弱点が多くあるので、法律上は勝てないという。その理由は、確かに柳子と深の結婚したことは明らかだが、柳子の産んだ子が深との間の子であるという証拠がない。さらにそれを証拠立てる鳥庭夫人も死んでいるし、祖母は老齢のため証人としては不十分だし、父親は娘が子を産んだことも、人にやったことも知らされていないのだから、承認人はならない等々（第73

回)。これらはほぼ原典に忠実である。中でも柳子と深の間に交わされたであろう手紙の存在が、これらの決定的な証拠となるが、それは後程発見されることになる。

＊悪徳代言人筋川を是が非でも淡は私的弁護人として雇うことを約束する（第74回）が、これは原典にはないし、その事務所に筋川を尋ねてきている客（後でジプシーの若者と判明）が、気になる話をしているのを、淡が立ち聞きする場面も原典にはない。

＊妻松子から電報を受け取った淡が急遽館に帰ると、シーコムの駅に迎えに来ている御者が、家番の麻村夫人が死の床にあって松子夫人が看病していることを告げる。家番の女が熱病のため、譫言（うわごと）で、淡が清を殺した経緯を喚き散らしているその言葉を訳者は書き留めているが、原典では、確かに譫言でそうしたことを言うとマッジ夫人は夫に告げるが、具体的にその言葉は書かれてはいない。また殺人の証拠となる血の付いたハンケチは、淡が病人の枕の下から発見し、これを焼却するが、訳本ではこれを淡がいくら探しても見つからないということにしている（第75回）。それはこの占い女の息子が、悪徳弁護士筋川のもとに殺人の証拠として持って行って、淡から大金をせしめようとしているからである。

＊訳本（第76回）では、栗田が訴訟を断念せざるを得ないことを江木茂に伝えると、江木は事情の一切を娘の楓に話し、自分が本当の父親ではないことを告げる。栗田は楓を失望させたことを哀れに思い、また楓の相続を当てにしたものではないことも言い添えて、楓に愛ゆえに純粋に結婚を申し込む――セント・ジェイムズ公園の場面――は、原典通りではない。原典では、訴訟の断念はなく、またエルグッドがこれに失望する場面もない。モーリスのジャスティーナへの結婚の申し込みは、既にジャスティーナには相続の成り行きを話し、エルグッドにも実の父親ではない旨を話させ、また相続のための訴訟はしないで、示談にしてほしいという言質も取ったうえでの、申し込みというのが原典である。

＊訳本（第78回）では、栗田はさらなる証拠を入手するために、シーコムの駅から再び鳥庭柳子のもとに行く途中、筆井家の門前を通ると、家番

の二階の窓から家番の老婆が突然顔を出したのを淡が引っ込め、窓を閉める場面を目撃する。だが、原典では、シーコムの駅から徒歩で筆井家に行くには大変な距離があり、鳥庭家はシーコムと筆井家の中間にあるので、シーコムの駅から筆井家を経由して鳥庭家に至るのは道順が違う。また原典では、家番の女を怪しいとモーリス（栗田）は最初に出会った時にも思ってはいたが、訳本では、この夜窓から出した顔とさらにその首に巻いたハンケチからして、栗田は二年前エボルシャムの町で筆井清の占いをした女だということを思い出す。そしてこの女がなぜ淡の邸に雇われているかを推察して、この女の息子が栗田にハンケチの証拠を売ろうとしたことに思い当たる。それで殺人の現場を見たのは、この女だったのだと悟り、それゆえ、淡は証拠の女を館に囲うことで、秘密保持をしようとしているのだと推察する。

だが原典では、モーリス（栗田）はこの家番の女が清の手相を見たジプシーであることには気づいていて、なぜその女がここにいるのか不思議に思うが、この女が殺人の現場を見て、証拠のハンケチを保持しているなどということは知らない。

＊極悪人代言人筋川の事務所を再び訪れた際、淡は家番の女の息子捨吉が出て来るのに出くわし、なぜ捨吉がここにきているのかを不思議に思う（第80回）。原典ではこのような場面はないし、捨吉が筋川弁護士と証拠のハンケチを巡る取引をやっているというような筋はない。ここから派生する話の展開は、まったく原典とは無関係である。以下、訳者涙香の独創的展開を見ておこう。

筋川弁護士は、淡が捨吉を知っていることをネタに鎌をかけて、証拠のハンケチを持っているといい、淡の財産の半分を呉れるなら弁護を引き受けてやると、悪の本性を顕わし、淡を追い詰めるが（第82回）、原典にはこのような筋書きはない。筋川弁護士は、このままではあなたは全財産を馬骨嬢（楓）に奪われるから、私と協力してこれを守り、それを私と山分けしようという。それに血の付いたハンケチを添えて。淡がこの山分けの話を断ると、筋川は、ではあなたを殺人罪で告訴するから、他国に出奔し

た方がよろしいと脅す（第84回）。

淡は血の付いたハンケチ一枚で殺人の証拠にはならないと反論すると、筋川は、このハンケチは捨吉がかつて栗田に売買を持ちかけたことのある代物で、捨吉の母がそのハンケチの由来を書いてハンケチ共々捨吉に持たせてあること、また捨吉が筆井の館に侵入したとき、老婆の頼みで、彼を無罪にしたこと等々を言いたてる。そしてハンケチは十分の証拠になるし、さらには自分は栗田の側の原告となって正直に告訴し、淡の財産をすべて勝ち取り、その一部を後継者から報酬に貰うつもりだともいう。こうして淡と筋川は喧嘩別れをする（第85～86回）。

だが、筋川は必ず淡が再び戻ってきて、降参するから山分けしたいというに違いないと思い待っている。すると淡が再び姿を見せ、今度は降参はするが、こちらの条件を飲まないと自分は家屋敷を後継者に譲り、銀行から30万ドル引き出してきた金を持ってオーストラリア（豪州）へ行くことにしたという。そうなれば筋川には一文も入らないことになるが、それが嫌なら手元に3万ドルあるのを手付として、成功したら残りの27万ドルを与えると約束し、それを条件に、勝訴するよう手を尽くせと筋川に迫る。この話を、いったん帰りかけた捨吉が、窓の下で聞いている（第87～90回）。こうして淡と筋川は、勝訴に向けて結託し、悪事の手順を練る。

さて、芝居の出番を終えた楓を馬丁らしき男が呼び止めて、栗田がステーションで大けがをしたので、死ぬ前に楓の顔を見たいという走り書きを渡し、驚く楓を待たせてある箱馬車に押し込むと、一目散に走り去る。いくら待ってもステーションに着かないので、やっと変だと気付き、大声で叫んで馬車を止めさせようとするが、外からしっかりと戸を閉じられていて、馬車は人気のない場所を疾走し続ける。楓は、これは筆井淡の仕業だと感づき、自分を浚って亡き者にしようとしていることを悟る（第91～92回）。

ようやく馬車が止まると、楓は男二人に猿轡をされ、手を縛られ、目隠しをされると、しばらく歩かされ、そして突然担ぎ上げられて、船に乗せられたことに気付く。楓を水に沈めることに及び腰の淡は、あとをすべて

筋川に任せて、立ち去ろうとするが、船の上で筋川は、礼金の30万ポンドではなく、淡の財産の半分をよこせ、さもなくば、楓にお前の身分と姓名を明かすといって脅し、淡に財産半分を与えるという証文を書かせる（第93～94回）。

（天理図書館所蔵涙香小史譯述『人の運』後篇）

この事件の進行と並行して、栗田が、柳子と深との夫婦の関係を証明する手紙などの存在を探るために再びシーコムに行き、屋根裏部屋で柳子が夫深からの手紙を読む場面、ロウソクによる柳子の火傷とそれを救出する場面、そして栗田自身が再度その手紙を自分の目で確かめ、これで証拠が出そろったと喜び勇んでロンドンに帰る列車場面は、原典通りである（第95～97回）。

だが、列車の中で、乗客の読んでいる新聞に「花山花子、本名江木楓女の失踪」が報じられているのを目にし、さらに次の新聞では、テームズ川の下流の船着場で、楓のものと思われる頭挿（かんざし）が見つかったことが報じられ、楓の失踪にはある紳士Kが関わっていると示唆されているのを目にする。Kとは栗田自身のことである。この報道を見て、栗田は、淡の仕業だと思い、楓のためにも亡き友人清のためにも、淡に復讐することを誓う（第98回）。勿論原典にはこのような話はない。

さらに原典には関係なく、訳者涙香の独創的創作は続く。停車場で馬車をひらおうとしていると、栗田は目の前で先に馬車に乗り込む二人の男を見かけ、その一人は筆井淡であると認め、捕まえようとするが、馬車は出発してしまう。もう一人の男は筋川弁護士であるが、後程栗田が改めて淡のロンドンの屋敷に行くと、門からちょうど出てきたのが、この筋川だが、

栗田はこの男に、「隈高さん」と呼びかける。淡の屋敷に駆けつける前に、ひとまず栗田は、江木茂のもとに馬車を走らせ、楓の安否を尋ねるが、江木はもう楓は死んだものと思い泣くばかり。そこで芝居の座主に尋ねると、これも同様にもう死んだものと思い、楓の代役を探す方に傾いている。そこに掃除夫が拾ったといって紙片を持ってくるのを見ると、淡の書いた楓誘拐の手紙であった。これで淡が楓を誘拐し、殺そうとしたことが判明し、栗田は再び馬車に乗り込むと、筆井淡の屋敷に向かう（第 99 ～ 100 回）。

原典では、ずっと前に栗田が鳥庭家の息子（訳では死亡したとされている）に語った昔の恋人に裏切られた話が、訳の第 101 回に言及され、その中に原典にはない悪徳弁護士筋川が、隈高という名前で登場し、栗田がかつての恋人に裏切られる場面を見ていて、金を出せば誘拐してやるとか、また裏切った女が別の男と結婚するのを知って、栗田が女から貰った恋文をネタに、女の父親を強請り、口止め料として大金をせしめようとしたことが述べられる。あの隈高が、今筆井淡の屋敷の門口に出てきた筋川となって物語に挿入されているが、勿論この隈高といい、筋川という悪徳弁護士がこうして物語の主筋に大きく関与し、楓を誘惑したり、殺そうとしたり、淡を脅して、手を組むことをやってのけることは、原典にはない。

栗田は筋川（隈高）が筆井淡に雇われ、楓殺しに関わっていると見て、偽手紙の呼び出しのことを言って、筋川に迫るが、筋川は知らぬと嘯き、淡に尋ねるがよいというので、筋川を手放してしまう。だが屋敷には張本人の淡はいなく、栗田は筋川を取り逃がしてしまう（第 102 回）。そこで栗田は川岸弁護士のところに行き、一切の事情を打ち明け、筋川が淡と組んで楓を亡き者にしようとしていることを説明する――筆井深から楓に宛てた手紙を入手したこと、筆井家の門番の老婆が清の手相占いであったのを淡が清殺人の証拠を握られているので、自分の館に雇っていたことなど。これを聞いた岸川弁護士はすぐさま淡の弁護人大磯と会って、なぜ淡が悪人の筋川などを雇ったかと尋ね、裁判長にも会ってすべてを語り、証拠を見せて訴訟の準備をし、警察にも淡と筋川の不審な行動を見張らせたいという（第 103 回）。原典にはこのような展開はない。

川岸弁護士は栗田に約束したことを実行する。大磯弁護士に会って淡が筋川を雇ったことを知り、裁判長（検事長）に会って、一切の事情を説明し、淡と筋川に探偵を付けてくれというと、検事長は楓の失踪容疑の参考人として淡の出頭を命じ、予審官に取り調べをさせる。だが淡は筋川を一時は雇ったが、すでに解雇した、後継者が正当な者であれば、家屋敷を譲るつもりだといい、金銭を銀行より引き出したりしていないなど、平然と審問をすり抜ける（第104回）。勿論このような展開は、原典にはない。

淡の取り調べをした予審官から、取り調べの中身を聞いた検事長は、淡の返答があまりにも善人過ぎて、前もって筋川と示し合わせて、答を用意していたと疑い、淡と筋川に探偵を付けようということになる。川岸弁護士はこれで納得する（第105回）。

淡は妻が熱病を家番から移されて寝込んだと知り、筆井郷へ戻る。他方、筋川の事務所を見張っていた探偵がそこに出入りしている捨吉を逮捕して、裁判官が取り調べ、淡の名前の入った血の付いたハンケチを見つけるが、これのみを以て淡による清殺害の証拠とは断定できないといわれたことを、川岸弁護士は栗田に語る（第106回）。原典にはこのような展開もない。

血の付いた名前の入ったハンケチがもとで、淡と筋川は二人とも逮捕される。それはハンケチに付着していた血の付いた拇（おやゆび）の指紋を写真に撮り、捨吉の拇（おやゆび）の指紋を撮り、それを幻燈機を使って白い壁に大写しにして比べ、相違していることから、ハンケチの指紋について、予審官に訊問された捨吉はすべてを白状した。それで淡が逮捕され、淡自身の拇の指紋が撮られ、これも大写しにされて、ハンケチの血の指紋と同一と判定さる。さらに筋川に頼まれて捨吉が楓殺しを実行したことを白状したので、淡は逃れる術もなくなるという、英国全土で前代未聞の裁判となった（第107回）。勿論原典にはこのような裁判はない。

予審の成り行きを待っている栗田のところへ川岸弁護士が来て、淡がすべて罪を白状したこと、そして筋川は事務所を捜索されて、淡の財産の半分を受け取る約定を発見されるが、淡が約定を違えた場合のため、楓を殺さずに、町はずれの隠れ家に隠してあると白状したので、既に楓を救出し

て裁判所に連れてきていることを話す。

この後楓の訴訟により、筆井家の身代はすべて楓のものとなり、筆井淡は獄中にて病死、筋川は終身刑となり、捨吉は十年の苦役を宣告される。淡の二歳の息子に楓は生涯困らぬだけの財産を与え、乳母に育てさせ、鳥庭家の実母柳子を迎えて、自ら介抱するに、柳子ほぼ正常に復するまでになる。江木老人は筆井家の隠居に収まる。栗田は楓と結婚し、蜜月の旅に上がる列車の中で、楓が愛読していた詩集の作者が自分であることを白状し、楓を驚かせる。

二人は一年間大陸を旅し、ロンドンに帰ってくると、女優花山花子の評判は消え去っていて、筆井夫人の帰朝として諸新聞は書き立て、またこれまで友人清が殺されたことでその容疑者として栗田を無視してきた文學倶楽部は、栗田が次に出版した小説『人の運』の好評によって処女作の詩集の作者も栗田と知り、栗田を歓迎するようになる。訳者はこれらを「人の運」と呼んで、それは「實(げ)に測り難き者なるかな」と結んでいる（第108、最終回)。

この結末で、楓が実母柳子を一時世話する点、栗田が詩の実作者であることを妻楓に告白し驚かせる点は、原典通りであるが、淡の牢獄での病死や、筋川の終身刑、捨吉の十年の苦役などは、訳者の創作である。

結　語

以上、原典『不思議な世界』に照らして譯述『人の運』の原典との相違を詳しく指摘してきた。このことから、次のようなことが明らかとなった。それは、端的に言うと、涙香が原典に基づきながらも、それに相当手を加え、ある場面は端折り、ある場面は原典を敷衍し、さらには原典にないものを次々と創作し、筋の展開をより複雑にして、話をより劇的にしようとした。その結果譯述は原典に忠実なものではなくて、涙香の他の譯述に多く見られるように、翻案、あるいはある部分、特に後篇の71回から最後の108回の部分などは、ほぼ涙香の独創的創作と呼ぶに相応しいものに大変身

を遂げているということである。

さてこの譯述の評価であるが、まずエリザベス・ブラッドンの原典 *A Strange World* を文字通り『不思議な世界』と訳さずに『人の運』と訳したことは、極めて適切であると評価したい。原典の本文中で作者は、人間の住む世界は不思議な人間関係の糸の錯綜から成り立つものであり、その世界を支配しているのはまさに "Destiny"（運命）であるといい、唯一人間がその運命に抗うことができるのは、自らの力で、それに終止符を打つことであると結論しているが、そのような運命に翻弄される人生の一齣を描いたのが、この小説である。まさに『人の運』とは言い得て妙である。

この譯述は原典に忠実な翻訳ではなく、むしろ翻案、あるいは創作と呼ぶに相応しいと述べたが、そうした点からみると、涙香が用いている「譯述」という言い方は適切ではない。ではこれを原典と比較して、翻案として評価できるかという点であるが、涙香の探偵小説家としての力量は遺憾なく発揮され、その方面では魅力的な作品に仕上がっているということはできる。だが、率直に言って、これは原典を超えうるものになっているとは言い難い。

原典は19世紀中葉から登場し、一世を風靡したSensation Novel（煽情小説）を代表する小説の一つであり、作者ブラッドンの他の作品、例えば、*Lady Audley's Secret* や *Aurora Floyd* に見られるように、ヴィクトリア朝の固定した価値観や風習――階級制度、家父長社会等々――に衝撃を与え、新しいものの見方や生き方を見出そうとするテーマを扱っており、その中には必ず殺人事件が起こり、これを巡ってある人物がその謎を解こうとする過程が描かれている。『オードリー夫人の秘密』では、弁護士のロバート（Robert）が、『不思議な世界』では、これまで見たように、文学者のモーリス（Maurice）がこの役を演じている。そうした意味では、『不思議な世界』はある種の探偵小説でもある。

だが、ブラッドンはそれを、いわゆる「探偵小説」として書いたわけではない。彼女はそれを「煽情小説」ということは意識しながらも、普通、小説（Novel）と呼びならわされている純文学作品の範疇のものとして書い

た。したがって、この作品は、殺人事件をきっかけにその謎の解明もなされ、犯人の特定化も行われるが、探偵小説のように、あくまでも犯人の特定化と検挙、法廷での尋問、それに続く判決を以て終始する事件解決ものではない。それが主筋ではなく、作者はそれよりも、人間としての値打ちがどこにあるのかを小説の眼目としている。

例えば、謎の解明を進めるモーリスは、あくまでも恋人ジャスティーナの和解案を承認し、友人ジェイムズの殺人者であることが判明しているチャーチルを殺人犯として告訴することはないし、ペンウィン夫人マッジのような誠実な女性は、あくまでも夫に寄り添って、夫の犯した罪を神に懺悔しながら、夫に代わって死んでいく。そしてそのような妻の愛と献身に心打たれた夫チャーチルも、すぐに妻の後を追って自殺して、己の「運命」に終止符を打つ。ここにはあくまでも良心の葛藤がテーマとして追及されている。

こうした、いわば道徳劇に対して、探偵小説は、もちろんそれには人情も絡んではいるし、道徳的側面もあるが――否、道徳に照らして悪を裁くのが探偵小説ではないかという言い分もあろう――だがそれは、涙香が仕組んだように、筆井淡が悪徳弁護士筋川と結託し、あくまでも己の欲望を貫くために、正統な後継者の楓を誘拐し、果ては川に沈めようとするまでになると、これはもう小説（Novel）という範疇を逸脱して、探偵小説（Detective Story）となる。そうして、その探偵小説の範疇で、犯人の逮捕劇があり、裁判での証拠の検証と犯罪の立証があり、最後には罪の裁きが行われるという段取りになる。この間の筆井淡の良心の葛藤劇のようなものは、いささかも問題視されてはいないのが、この翻案小説の特徴である。

誤解のないように付け加えるが、涙香がここにいう小説（Novel）と探偵小説（Detective Story）の区分を知らなかったわけではない。むしろ明治中期に逍遙の『小説神髄』を基にして、小説といえば、逍遙の定義するような純文学ものでしかないかのような風潮が支配的であるのに対し、探偵小説のようなジャンルの作品も西欧では流行していることを江湖に知らしめんがために、敢えて探偵小説を書き、流布させようとした旨を涙香は、

「探偵譚に就いて」（『萬朝報』、明 26.5.11）に掲載している[6]。また涙香は犯罪をテーマとする犯罪小説には三種類あるとして、探偵談（デテクチヴ・ストーリー）、疑獄譚（クリミナル・ロマンス）、感動小説（センセエショナル・ノベル）の区分についても述べており、小説と探偵小説の区分はよく心得ていた。涙香研究の第一人者伊藤秀雄はこうした涙香を称して「探偵小説非文学論者」と呼んでいるほどだ[7]。

さらに涙香は、『人の運』の次号からの翻訳広告を、『萬朝報』に連載していた小説『嬢一代』の大尾に出して、「人の運ハ探偵小説にも非ず冒険小説にも非ず一種の人情的凄動小説とも云ふ可く浮世の様々を写したる者にして如何ほど清き家庭にて読給ふとも障り無きこと受合なれば弥益の御愛読あらんことを請ふ」と述べており[8]、ここにはこの翻訳は探偵小説ではないことを明言している。だが、実際の譯述『人の運』は、この予告を裏切って、探偵小説になってしまっている。「ノベル」と「デテクチヴ・ストーリー」の区分を承知しながら、涙香は原作者ブラッドンのセンセーション・ノベル（涙香流に言うと「人情的凄動小説」）をなぜか探偵談（デテクチヴ・ストーリー）と疑獄譚（クリミナル・ロマンス）に変貌させてしまった。

このようなわけで、探偵小説の元祖としての涙香を高く評価すると同時に、『人の運』に関する限り、本来の小説としての広い領域をある方向に狭めてしまったことは、如何に明治期の法制度批判および読者への啓発を意図したものであるという明治文学の御意見番柳田泉の弁護があるとはいえ[9]、問題点として指摘されねばないだろう。

付記：『人の運』の挿絵の本論文への掲載については、原本所蔵の天理図書館の許可を得たものである。また、本論文では、「ジプシー」や「狂婦人」など、時代性に鑑み、一部原典や翻案の表現をそのまま用いたことも、断っておく。

註

1. 伊藤秀雄『黒岩涙香――その小説のすべて』（桃源社、昭和46年）、210頁、『黒岩涙香――探偵小説の元祖』（三一書房、1988）、428頁。
2. 小森健太郎『英文学の地下水脈――古典ミステリ研究～黒岩涙香翻案原典からクィーンまで』（南雲堂、2009）、115頁。
3. 例えば、三木愛花の漢文小説『情天比翼縁』は、新日本古典文学大系（明治篇）『漢文小説』（岩波書店、2005）に収録されており、読み下し文に書き直されているので、一般読者も馴染むことができる。
4. 前掲書　伊藤秀雄『黒岩涙香――探偵小説の元祖』を参照のこと。
5. 高橋康雄『物語・萬朝報――黒岩涙香と明治のメディア人たち』（日本経済新聞社、1989）
6. 伊藤秀雄『明治の探偵小説』（双葉社、2002）、120-121頁。
7. 同書『明治の探偵小説』、117-119頁。
8. 前掲書　伊藤秀雄『黒岩涙香――その小説のすべて』、210頁。
9. 柳田泉は、涙香が明治二十年代前後の腐敗した政治・社会を大衆の側に立って大岡政談の如く批判したのが探偵小説となったのだとして、涙香の正義感を表明したものとして、逍遙、二葉亭に並ぶ涙香の文学史上無視することはできない「文学的天才」としての存在意義を強調している。「涙香以前から涙香へ」『柳田泉の文学遺産』第二巻（右文堂、2009）、263-72頁参照。